

Ichiritsu-Press

学校だより
No.61
2009.12



浜松市立
高等学校

〒432-8013 浜松市中区広沢1丁目21番1号 TEL053-453-1105・1106 FAX053-452-9478
URL <http://city.hamamatsu-szo.ed.jp/ichiritsu-h/> [✉ichiritsu-h@city.hamamatsu.szo.ed.jp](mailto:ichiritsu-h@city.hamamatsu.szo.ed.jp)

特集① 感性と知性を磨く

市立高校では10～11月にかけて、講演会などが行われました。

● 演劇教室 ●●●●

本浜松高校演劇教室第46回公演が、はまホールにおいて10月1日に行われました。今年度は浅田次郎原作の劇団文化座による「天国までの百マイル」という作品が上演されました。この作品の主人公はバブル崩壊で家庭も財産もすべてを失った中年男。その主人公が重い心臓病の母を助けたい一心で、周囲の人々の励ましに助けられながら、オンボロワゴン車で「百マイル」を走り抜く姿が描かれていました。人間は困難に直面したときに「愛」と「勇気」があれば乗り越えられるということを、教えられた感動の作品でした。(担当 神田)

(生徒寸評より)

人と人との絆の強さを学ぶことができました。生きていく上で必ず自分を支えたり、大切に思ってくれる人はいる。

母を思う主人公の気持ちや、それを取り巻く人々の優しさが心にしみました。彼らのような素直な人になりたいです。

この作品を通して、家族や大切な人を強く思う気持ちを改めて考えさせられました。私も家族を大切にしたいです。

● 文化講演会 ●●●●

毎年秋に行われているこの生徒会行事、今年は国内外で活躍中のプロゴスペルグループ「THE SOULMatics (ザ・ソウルマティックス)」を招いて芸術鑑賞会を行いました。GOSPELは「GOOD SPELL」(良い知らせ)が語源です。北アメリカでアフリカ系アメリカ人が奴隷として働いていた頃に生まれた音楽で、後に教会で歌われるようになり、社会や音楽の変化と共に形を変えてきたもののそのメッセージは変わらず現在に至ります。

ゴスペルのスタンダードからゴスペルアレンジのポップスまで披露され、会場全体が生徒全員の歌声で震える場面もみられました。中には涙する生徒もいました。ゴスペルアレンジの本校校歌が歌われるサプライズもあり、感動的な舞台となりました。(担当 池谷)

以下、生徒の感想の一部です。

- ・受験という大きな壁に負けそうになって自分を見失いそうになっていた時、この歌声が聴けて本当に良かったです。
- ・歌うだけでなく、1曲1曲の説明をしてくださり、より深く歌を鑑賞できました。
- ・今回もらったメッセージをこれからの自分の糧にしたい。
- ・「成功の反対は失敗ではなく、何もしないことだ」という言葉がすごく心に残っている。



● リーダー育成講座 ●●●●

11月10日に、静岡文化芸術大学副理事長(前静岡県教育長)の鈴木善彦先生をお招きして、「高校生から学んだこと、高校生に伝えたいこと」と題してリーダー育成講座を開講しました。



高校教師、教育長として出会った3人の事例をあげられました。生徒は「志を持つこと、目標を追い続けることの大切さがわかった」と共感していました。豊かな・不確実な今を「十代、平成は特別で大切な時期なのだ」と感じ取りました。また、浜市スピリットを持った文化芸術大学の先輩の話聞き「先輩たちのチャレンジ精神には感動しました」と本校生としての誇りを深めました。そしてリーダーとは「他者の気持ちがわかり、なおかつ自分の気持ちも整理できる人」と考えた生徒もいました。生徒の心にしみ、心にエネルギーをもらい、受験への挑戦の気持ちや高校生活をさらに充実する決意を新たにしていました。(担当 一之瀬)

● 曳馬野学苑 ●●●●

「勉強すること」鈴木光司

曳馬野学苑とは、浜松市立高等学校PTAが主催する自主的な研修の場として開設された講座です。本年は11月26日に浜松市中区出身で「リング」「らせん」の著者である作家鈴木光司さんをお招きして「なぜ勉強するのか」の演題で講演をお願いしました。今回は保護者約367人に加えて一年生にも聴いてもらいました。

講演は、「勉強することとは「理解力」「創造力」「表現力」を身に付けることである」を中心に、ご自身の小学校5年生に立てた三つの目標、主夫と小説家の「兼業」生活など、有意義な内容でした。講演終了後の書籍販売・サイン会も好評で長蛇の列となりました。

(担当 西宮)



「制服」の役割 — 制服はユニホーム —

制服は、いったい何のためにあるのでしょうか。今一度、市立高校全体で考え直して下さい。

制服には、①その学校のユニホームである。

②気持ちを引き締めるもの。

③外部の評価基準になるもの。 という役割があります。

制服が、その学校のユニホームであるからには、そこに個性が入る隙はありません。

たとえば、プロの野球選手やサッカー選手といった方々は、ユニホームを着崩しません。きっちりとユニホームを着ており、そのユニホームに対して誇りさえ持っているように見えます。皆さんも部活の大会の時など、部活のユニホームを着崩している人はいないと思います。何故、部活の時はきちんと着るのに、学校の制服は着崩さなければいけないのですか。

「ボタンがはずれている。」「ネクタイ、リボンが曲がっている。」「シャツがはみ出ている。」などは、どれも格好良くはありません。だらしく、格好悪いだけです。

「それが個性だ!!」と言う人もいるでしょうが、本当にそうでしょうか。ただ、周囲に流されているだけではないですか。流行にのせられるだけの個性は個性ではありません。「一人で自分を律して生きていける姿勢」の中にこそ本当の個性があります。見かけだけで自分を表現できないというのは、最も個性がありません。目に見えなくても個性というものは理解されていくものです。

制服は制服であって、皆さんの自由にできる私服ではないのです。「制服」＝「ユニホーム」の着崩しに個性を求めないで下さい。制服には、個性的で自由な着こなしはあり得ません。「正しく着る」という当たり前のことを当然にしましょう。「わざと着崩す」という当たり前でないことを当然にすると、ずるをする自分、怒られなければ何とかなるという卑怯な自分が当たり前となり、社会人としてこれから生きていく上で損をします。

現在の服装の規定が、社会人の常識や社会での慣習という面で考えると、どういう意味を持つのかよく考えて、高校生という立場に甘えることなく「制服」＝「ユニホーム」を着こなしに行きましょう。

制服を正しく着て気を引き締めよう!

制服を着て勉強すると、私服を着て勉強するよりもずっと集中力を持って、勉強できると感じたことはありませんか? 制服には着用することによって公私のけじめをつけ、気を引き締めて集中力を高める能力があるということです。

なぜ、そのような能力があるのでしょうか。

制服は「正しく着こなすのが当然だ。」という常識があるからです。人間は、正しいことをしながら、同時に裏で正しくないことはそう簡単にはできないものです。「制服を正しく着こなす」という正しい行為をしつつ「しなければいけない勉強を怠る」という怠惰なことをしようとは考えにくくなる。だから、制服を着たというけじめの感情が「当然、勉強をする」という意識に結びつき、集中できるのです。

他にも普段は挨拶をしない人でも、集団の代表という気持ちが芽生えて、挨拶を互いに交わしたりしようと思えてきます。こういう風に「制服を着る」行為が、気を引き締めて、前向きによい行動をしようと思えることに繋がっていきます。そして、その効果を最大限に引き出してくれる場が学校だと思えます。

学校に対して、「学校は知識を得るために来る場所」「今、その知識をどこで活かしたらいいかの方が問題」、「使わない知識を得るために学校にいる時間は無駄なのではないか」、「自分の必要な答えだけ教えてくれたらいいのに」と思っている人も多いのではないのでしょうか。

しかし、知識を得るだけが学校ではありません。例えば、化学の「化学反応式」を覚えなければいけない時、将来100%使わないから覚えないという取り組み方は、自分の取り組みに対する言い訳の部分が大きいのではないのでしょうか。言い訳をして取り組まない自分を正当化していませんか。それでは、学校という場に身を置く意味が半減してしまいます。

学校は、「知識を学ぶ場である」と同時に「生徒が自分自身を鍛える場」でもあります。どんなに学校が助け船を出す努力をしても、自ら何もしない生徒を手助けすることは不可能です。より充実した学校生活を送るために、より自分自身を鍛えるために、今一度、自分の服装を見直してみませんか。最も基本であり、最も簡単に正すことができる「制服の着こなし」から直して、気を引き締めて学校生活を送りましょう。

「いちりつ」への信頼と制服

あなたが見知らぬ人を見る時、どこを見てその人を判断しますか。一番多いのは「服装」だと思います。服装が、人間性を表すことが多いからです。「服装は個人のシンボル」だと言えます。優良企業の社員は、やはり「さすが!!」と言われる着こなしをしています。なぜでしょう? 個々の自覚がしっかりしていて、その企業に誇りを持っているからです。「制服は組織のシンボル」だと言えます。

「制服は組織のシンボル」と言う目で、地元の人たちも、生徒の制服の着こなしを見ています。もちろん、地元の人たちの学校に対する評価は、進学率、偏差値、部活の実績などで決まるのだけれども、制服の着こなしも最も大きな決定要素の一つだと思います。制服を着ている近所の高校生を見た時の印象が、学校の評価になります。

では、なぜ評価が大事なのでしょう。それは、「評価」が、直接「信頼」につながっているからです。実際に学校の評価は、就職活動中の先輩、つまり何年後かのあなたに密接に関連しています。「いちりつ」の卒業生が、地元での就職で「浜松最強」の名を欲しいままにしているのは、先輩たちの作り上げた信頼の賜です。共学化した今でも、市立高校の評価が保たれているのは、長い間の清楚なイメージがあるからです。私たちもそれを守る義務があります。

制服を「テキトー」に着る意識になると、自分たちの評価を自分たちの手でおとしめてしまいます。一度落ちてしまった評判は、戻りません。同じように、一度失った信頼も元に戻らないのです。私たちは、制服を着る時、このことを常に心に留めておくべきだと思います。

1) 年) 部)

先日作家「鈴木光司」氏の講演がありました。1年生も全員聴講しましたが、その中でこんな言葉がありました。

「叶えたい夢や目標があるならどうやってそれを実現させるか道筋をたどって書いてみなさい」

おもしろくて具体的であり、わかりやすい考え方です。

「市立高校合格」という大きな目標を達成した1年生にとって次の目標はすでに「ロックオン」されているはずですが、具体的に前に進んでいるのでしょうか。そんな中で、毎日の学習時間を見ていると少し足りないようです。もちろん部活動も大切ですが、それだけになってはいけません。市立生のいいところは「文武両道」ができることです。「時間が足りない」という言葉をよく耳にしますが、1日を振り返って無駄な時間を過ごしていないのでしょうか。鈴木光司氏の言葉を借りるならば「一日の過ごし方を書いてみる」というのはどうでしょうか。(一学年主任 坂本 臣)

2) 年) 部)

インフルエンザの影響を懸念されていた修学旅行も、全員参加することができました。この大流行の中改めて市立生の自己管理能力の高さに感心しました。天候に恵まれなかったりトラブルがあったりしましたが、各コースとも有意義な研修ができたと思います。

生活面においては、全体的には落ち着いた生活を送れていると思いますが、学習への意欲はまだまだ欠けているのではないかと思われます。テスト週間以外の平均学習時間が2時間を超えることはありません、これは日々の学習習慣が未だに身につけていないということではないのでしょうか。自分の進路を本気で考え、模擬試験の結果を真摯に受け止め、今自分がやらなければならないことをやり抜く強さをもって欲しいと思います。

水泳の北京オリンピック金メダリスト北島康介選手が、1年数ヶ月ぶりに復帰しました。

「なぜ今復帰したのか」の間に対して北島選手は「少なくとも今復帰しないと、ロンドン(次のオリンピック開催都市)

には間に合わない」と答えたということです。

(二学年主任 宮本 克彦)

日常風景

3) 年) 部)

2学期は、3年生を中心にして体育大会が大いに盛り上がりました。体育委員や応援リーダーを軸にしてクラスが一致団結し、多人数の縦割り集団を見事に導いてくれました。このような活動を通して、3年生の生徒諸君には最上級生としてのプライドが身についたように感じます。家庭でも、子どもたちのちょっとした言動に「いつの間にか大人になったなあ」と感じるものが多くなってきたのではないのでしょうか。1・2年生の時には少々頼りない感じもありましたが、3年生になってからは精神面が著しく成長しました。考え方や問題の捉え方にバランス感覚が備わり、大人として対等の会話ができるようになりました。

いよいよセンター試験が始まります。悔いの残らないように「最後の最後までベストを尽くす」をモットーに誠心誠意の努力を続けていただきたいと思います。その姿勢こそがこれからの人生の糧になり生きる力になるものだと確信しています。栄冠を我らに!

(三学年主任 佐藤 和久)

浜松水産物協同組合の方による魚料理講習会



今後の主な予定 (1月~3月)

1月6日	始業式	3月1日	卒業式
1月16・17日	センター試験	3月3~5日	入学者選抜
1月23日	1,2年進研模試	3月19日	終業式
2月2日	校外走	3月23・24日	イングリッシュキャンプ
2月4日	インターナショナルクラス選抜	3月30日	離任式
2月22~25日	1,2年生学年末テスト		

TOPICS

大学模擬授業

12月3日に静岡大学の工学部、情報学部、静岡県立大学の薬学部、国際関係学部、静岡文化芸術大学の文化政策学部、デザイン学部の教授や講師をお招きして、大学模擬授業が行われました。



静岡県立大学
国際関係学部国際関係学科
小久保康之教授による
「国際社会に与えるEU
の意義」

静岡大学
工学部電気電子工学科
犬塚博教授による
「次世代デジタル計測
機器開発への挑戦」



本校生徒の主な活躍

日本ジュニア・ユース陸上競技選手権で大石真功君（20HR・富士田子浦中）が男子400m2位、村田尋紀君（24HR・新居中）が男子棒高跳5位

JSCA全国ブロック対抗水泳競技大会15～18歳の部で嶋村亜美さん（18HR・鷺津中）が50m自由形、200mバタフライとともに大会新記録で優勝

国民体育大会で影山湧亮君（35HR・天竜中）が少年男子棒高跳で5位入賞、大石真功君が少年男子400mで6位入賞、少年女子B100mバタフライで嶋村亜美さんが8位入賞

朝日新聞社主催「WE LOVE トンボ」絵画コンクールで松本祥男君（10HR・八幡中）が金賞（朝日新聞社賞）

これ以外にも多くの生徒が県大会、東海大会で優勝や入賞をしております。



2年生修学旅行のスナップ

12月8日から11日にかけて、韓国、台湾、沖縄、北九州の4コースに分かれて行ってきました。

